

# フランス革命後の英仏経済学の交流についての研究

## A Study of Intellectual Exchanges of Economic Thoughts between France and England after the French Revolution

喜多見 洋  
Hiroshi KITAMI

フランス革命後の英仏経済学交流の一齣として、英仏経済学の接点に位置するガルニエの経済思想について、ガルニエ版『口富論』仏訳1822年版の「序」と「訳注」を利用して検討し、次のことがらが明らかになった。すなわちまず、1822年版の「序」と「訳注」では1802年版のそれにかかなりの変更が加えられ、分量もだいぶ増えているということ。そしてガルニエの見解は、基本的な点では晩年まであまり変化していないが、1822年版には、当時盛んになってきていたスミス批判に対するガルニエの反論やリカード、マルサス、セーといった同時代の経済学者の見解についてのガルニエの論評が加えられ、その中には数々の興味深い記述がみられるということ。さらにこうした変化の原因は、ガルニエ自身の見解が変化したというよりも、晩年のガルニエを取り巻く経済学の状況が変わり、彼がそれに対し彼なりの対応をした点に求められる、ということがあきらかになった。

これらをもとに1820年頃の晩年のガルニエをあらためて見直してみると、そこには19世紀初頭とはまた別な彼の姿が浮かんでくる。すなわち1802年版を出した19世紀初頭のガルニエは、カンティロンの影響を残しつつフィジオクラートの末流としての側面とスミス経済学の紹介者としての側面を併せ持ち、二つの面の間で微妙なバランスを保ちながらフィジオクラシーを立て直そうとしていたわけだが、晩年の彼にはさらに別な顔が加わる。それはスミス経済学の擁護者としての顔であり、これによりガルニエの学史上の位置も変化することになる。すなわち彼は、1820年頃にはフィジオクラートとスミスの見解を折衷しながらも、重心をややスミスの方に移し、リカードやセー等新時代の経済学の側からスミス経済学に加えられた批判に反論するスミスの擁護者たる位置にあったのである。ガルニエの反論は、旧来の経済学の側からの反論であり、古拙な感は否めない。けれどもここで明らかになったガルニエの姿は、従来、単にフィジオクラシーの延長線上に位置づけられるだけのことが多かった彼が、ともかくリカードやJ.-B. セー、マルサス等の経済学と取り組んで議論を展開しているという点で注目すべき姿であるといえよう。そしてこのような晩年のガルニエの経済思想は、良くも悪くもフランス革命後のフィジクラートの思考の到達点を示している。